

編集・発行 愛媛資料ネット（芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛）

〒790-8577 松山市文京町3 愛媛大学法文学部寺内研究室気付

TEL 089-927-9317 Eメール terauchi.hiroshi.mk@chime-u.ac.jp 郵便振替 01690-8-5497

## 日本古代の大地震史料

寺内 浩

東日本大震災を契機に過去の大地震を検証する作業が各分野で行われている。その際に必ずといっていいほど言及されるのが貞観11年（889）5月に起きた大地震と津波である。著名な史料なので以下に読み下し文と大意を掲げておく。

『三代実録』貞観11年（869）5月26日条

陸奥国の地、大いに震動す。流光、昼の如く隠映す。頃之、人民叫呼し、伏して起くること能はず。或いは屋倒れ壓死し、或いは地裂け埋殮す。馬牛は駭き奔り、或いは相昇り踏む。城郭・倉庫・門櫓・墻壁、頽落顛覆すること、その数を知らず。海口哮吼し、声は雷霆に似たり。驚涛涌潮、浜漲長し、忽ちに城下に至る。海を去ること數十百里、浩々として其涯を弁へず。原野・道路、惣じて滄溟となる。船に乗るに違あらず、山に登るに及び難し。溺死する者千許。資産苗稼、殆ど子遺なし。

（陸奥国で大地震があった。流光が昼のように輝いた。人々は叫び声をあげ、伏したまま起き上がることができなかった。ある者は家が倒れて圧死し、ある者は地面が裂け埋もれた。馬や牛は驚き走り、互いに踏みつけあった。数多くの城郭・倉庫・門・障壁が崩れ落ちた。海が雷鳴のように吠え叫んだ。海が盛り上がり、津波が城下に押し寄せた。海から遠く離れたところまで見渡す限り海となった。原野・道路はすべて海となった。舟に乗ることもできず、山に登ることもできずに、千人を超える人々が溺死した。財産も農作物もほとんど残らなかった。）

大地震が起き、津波が海から遠く離れた城下（＝多賀城）まで達したとある。ここに述べられている状況はまさに今回の東日本大震災の被害状況を彷彿させるものである。溺死者が1000人とあるが、当時の人口が500－600万人程度であったことを考えると甚大な数といえよう。

貞観大地震から18年後の仁和3年(887)7月、再び大地震が発生した。その様子を『三代実録』は次のように記している。

『三代実録』仁和3年(887)7月30日条

申の時、地大いに震動す。数剋を経歴して震ふことなほ止まず。天皇、仁寿殿を出で、紫宸殿の南庭に御す。大蔵省に命じて、七丈の幄二つを立て、御在所となす。諸司の倉屋及び東西京の廬舎、往往にして顛覆す。圧殺せらる者衆し。或いは失神して頓死する者あり。亥の時、また震ふこと三度。五畿内七道諸国、同日大いに震ふ。官舎多く損ふ。海の潮、陸に漲りて、溺死する者勝げて計ふべからず。其中、摂津国尤も甚だし。

(午後4時ころ、大地震があった。しばらくしても揺れはおさまらなかつた。天皇は仁寿殿から紫宸殿の南庭に出られた。大蔵省に命じて20メートル余りの幄(テント)を二つ立て、御在所とした。役所の建物や東西京の家の多くが倒れ、圧死者も多く出た。気を失って急死する者もいた。夜の10時ころにまた地震が三度あった。その日は全国で大地震があり、役所の建物が大きな被害を受けた。津波が来て、非常に多くの人々が溺死した。その中でも摂津国の被害が最も大きかった。)

この地震記事で注目されるのは、摂津国の津波被害が最も甚だしかった、とされていることである。これは大阪湾に大津波が押し寄せたことを意味している。とすると、記録には残されていないが、紀伊半島から四国にかけての地域にも大津波がきて甚大な被害を受けていたことは確実である。

なお、『扶桑略記』の同日条には、摂津国の被害記事に続いて、信濃国でも大規模な山崩れや川の氾濫があり、多くの人々が流死したとある。さらに、10月にまた地震があり、伊豆国から火山の噴火で新しい島が生まれたとの報告が届けられている。このように、仁和三年地震は東海・東南海・南海連動の巨大地震であった。

仁和三年地震の約200年前の天武天皇13年(684)にも大規模な地震が発生した。とりわけ四国で被害が大きく、道後温泉の湯が止まり、土佐国で大津波があったことが『日本書紀』に記されている。

『日本書紀』天武天皇13年(684)10月14日条

人定に逮りて大いに地震ふ。国挙りて男女叫び唱ひて東西を知らず。則ち山崩れ河涌く。諸国郡の官舎及び百姓倉屋・寺塔・神社、破壊の類勝げて数ふべからず。是に由りて人民及び六畜、多く死傷す。時に伊予湯泉、没して出でず。土佐国田苑五十余萬頃、没して海となる。古老曰く、是の如き地動、未だかつてあらざるなり。是の夕に、鳴声あること鼓の如し。東方に聞こゆ。人ありて

曰く、伊豆嶋の西北二面、自然に増益すること三百余丈、更に一つの嶋となる。則ち鼓の如き音は、神、是の嶋を造る響きなり。

同 11月3日条

土佐国司言す、大潮高騰し、海水飄蕩す。是に由りて調を運ぶ船、多く放失す。

(午後8時ころ大地震があった。国中の男女が叫び迷った。山は崩れ、河は溢れた。諸国の役所、人々の家、寺院、神社は破壊され、その数は知れない。このため人々や家畜が多く死傷した。伊予温泉は埋もれて湯が出なくなった。土佐国の田1000町歩余りがうもれて海になった。古老は、このような地震はこれまでになかった、と言った。この日の夕方、東の方で鼓のような声をした。人が言うには、伊豆島の西北の二ヶ所で300丈余り隆起して一つの島ができた。鼓のような声は、神がこの島を造る響きであった。

11月3日、土佐国司の報告によると、大津波が来て、そのために多くの税物を運ぶ船が漂失した。)

仁和三年地震の約200年後、永長元年(1096)と康和元年(1099)に連続して大地震が発生した。永長元年(1096)11月24日の地震の際には、堀河天皇が御所内の池の船に避難した。また、東大寺の鐘が落下し、近江国の勢多橋が破壊された。駿河国では400余りの家が津波で流出し、伊勢国安濃津(現在の津市)も津波のため大きな被害をうけた。康和元年(1099)の大地震は1月24日に起きた。当時の関白藤原師通の日記『後二条師通記』には、興福寺の廻廊と大門が倒れ、金堂や塔にも被害があったことが、『聖徳太子伝私記』には四天王寺の廻廊と樹木が倒れたことが記されている。また、『兼仲卿記』弘安6年巻紙背文書には土佐国の「国内作田千余町、皆以て海底と成り畢んぬ」とある。被害地域からみて、永長元年は東海沖地震、康和元年は南海沖地震であろう。

以上、古代におけるいくつかの大地震史料を紹介してきた。大地震が頻繁に起きているだけでなく、東北太平洋岸に大津波が押し寄せた貞観大地震から18年後に東海・東南海・南海連動の仁和3年大地震が、永長元年の東海沖大地震の3年後に康和元年南海沖大地震が発生していることはやはり注目されよう。もちろん、古代の大地震はこれだけではなく、また中世以降も大地震が頻繁に起きていることは周知の通りである。阪神大震災、東日本大震災はわれわれに大きな衝撃を与えたが、近い将来に間違いなく次の大地震が起きることを前提にさまざまな対策を講じる必要がある。

## 調査・整理活動、その他

◆日本史上の大地震については、『国史大辞典』（吉川弘文館）第6巻「地震」の項に一覧表があります。また、古代・中世の地震関係史料の検索には、静岡大学防災総合センターが公開している「〔古代・中世〕地震・噴火史料データベース」(<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/db/>)が便利です。

◆昨年度の愛媛資料ネットの活動には、科学研究費補助金（基盤研究(s)、研究課題名：大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築、研究代表者：奥村弘）が使用されています。

## 愛媛資料ネット活動日誌

2011年

- ・10月12日  
久万高原町で資料調査（3名）
- ・10月20日  
内子町で資料調査（1名）
- ・11月14日  
愛媛大学で資料の写真撮影（4名）
- ・11月23日  
新居浜市より大学へ襖を搬出（2名）  
愛媛大学でふすまの解体作業（7名）
- ・12月2日  
西条市で資料調査（1名）
- ・12月8日  
愛媛大学でふすまの解体作業（9名）
- ・12月15日  
愛媛大学でふすまの解体作業（10名）

2012年

- ・2月10日  
愛媛大学で資料整理作業（9名）
- ・3月13日  
愛媛大学で資料の消毒作業（3名）
- ・3月23日  
愛媛大学で資料の消毒作業（6名）